

「試練のただ中で支える真実の神」

第1コリント人への手紙 10章
東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏

----------*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*

ご無沙汰しております。今日のご来場頂きまして、本当にありがとうございます。
この東住吉集会で行われている福音集会のメッセージは、随時 YouTube でもアップされていますが、4月にアップされる動画からは広告が付くんですね。今まで広告無しでやって来たのですが、4月からは広告が付きます。私たちは付けたくないんです。YouTube社が勝手に付けるんです。

なぜ付けるのか。YouTube社にも言い分があって、広告が全く付いていない動画よりも、付けた後の方が視聴率がアップするというデータが出てくるんですね。そんなものなくてもアップしてたんですけど。私たちはそれを受け入れる以外ない、ということでCMが付いてしまうんですが、私たちが意識してやったんじゃないということをご了解頂いたらと思います。

CMというのを考えた時、ある会社を思い出します。ノーベル製菓というお菓子のメーカー。のど飴やグミなどのおやつをいっぱい作っている会社。そのCMの打ち方はちょっと変わっている。普通は、新製品が出た時にCMを打って消費者にアピールします。

ところがノーベル製菓は、新製品を例えば10種類くらい出す時、10種類全部CM無しで一般市場に流して2年待つんです。2年後、10種類の商品の中で1番売れている物が、淘汰されて「これは売れるぞ」ということがハッキリするんですね。その1番売れている物にCMを打つんです。CM無くても売れている物をCM付けて売るんですね。

CM無くても売れるということは、これを買ったお客さんは必ず満足する。だから、このCMは嘘じゃない。宣伝うまいからつい買ってみたけどガッカリ、みたいなことはよくあるんじゃないですか？しかし、ノーベル製菓ではそれはないと。必ず喜ばれる・満足してもらえるとハッキリ確認できている物にのみCMを打つので、そのCMには説得力があるし、自信を持ってお勧めできます！ということなんです。

ところで宣伝というのは、平仮名で“べ”“える”を付けると“宣べ伝える”です。私は今までこの福音集会で、イエス・キリストの福音を宣べ伝えて来ました。ある意味、宣伝してるんですね。なんで宣べ伝えているかということ、イエス・キリストの福音は、私なんかは伝えなくても十分に人の人生を変えて来たし、この福音が成立して以来2千年間、多くの人々の命を・人生を新しくし、希望を与え、永遠の命を与えて来ました。2千年にわたって、人の人生を変える救いを得させる神の力である、ということがハッキリと分かっているので宣べ伝えています。

今日は『試練のただ中で支える真実の神』ということで、有名な1カ所から一緒に考えたいと思います。

I コリント 10:13 非常に有名な箇所です。

あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。

あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。

むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。

今から 26 年ほど前、松本サリン事件がありました。オウム真理教が松本市の裁判所の裁判官たちを襲うために、サリンを霧状にして撒く噴霧器を作り、裁判官宿舎に行きつめたんですが、たまたま風に乗って、サリンが入り込んだ家があったんですね。河野義行（この よしゆき）さんという方の家です。彼が第一通報者です。

目の前で 妻が突然口から泡をブワーッと吐き出して、「どうしたんだ！」と抱き寄せようとした瞬間、自分自身の空間がぐにゃと曲がって見えて、彼もバタンと倒れ、這うように電話の所に行き、「大変な事が起こってます！」それで第一通報者だったんです。

しかし、一番最初にサリンの事件を通報したということで、却って疑われてしまいました。すぐに警察が来て家宅捜索したら、河野さんの家の倉庫に化学薬品が幾つか置いてあった。そして目撃情報で、この事件の少し前に、河野さんの家から白い煙が立ち上るのを見たという証言があったそうです。

奥さんは 8 人目の被害者ということで、十数年後に亡くなりました。

自分は被害者なのに「すぐに署に来てもらう。」 厳しい厳しい取り調べが始まって、「私は被害者です。私は知りません」と言うけど、「お前、被害者たちの気持ち 分かるとるのか。いつまで白を切るんだ！認めろ！」 初めから犯人だと決めつけられて。

そして、一旦家に帰るけど入れない。家の周りには新聞社・テレビ局・週刊誌、特に週刊新潮が酷かったそうですが、マスコミ取材陣がいっぱいで、お子さんが 3 人いるのですが学校にも行けない。そればかりか、河野さんの友人というだけで、住んでいる町内の町会長から「犯人の友人を町内に置いておくわけにはいかないから出て行ってくれ」とか、嫁いでいた親戚の女性が「犯人の親戚を家に置いておくわけにはいかないから離婚してくれ」と言われたり、被害者の家族を名乗る人から恐るべき脅迫電話が夜中の 2 時 3 時に掛かって来たり。「私はやってません！私は被害者です！」しかし、世間は完全に“加害者”というレッテルを貼って、彼はどんどん落ち込んでいきました。

そんなとき、四国に住んでいるクリスチャンが彼に手紙を送りました。河野さんが犯人だという前提で書かれた手紙です。そうなんだということで報道しているので、それを信じたんですね。しかし、自分が犯人だという前提で書かれた手紙であるにも拘わらず、少しも腹が立たなかった。手紙には『神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。』と書いてありました。

この御言葉を読んだ時、瞬間的に「越えられる。私はこの試練を乗り越えることが出来る！」と確信したそうです。なぜだか分からない。言葉は目に見えません。

だけど、目に見えない言葉が彼の心の中にズバツと入った時、「私はこの試練を乗り越えることが出来る。神は耐えられない試練にあわせることがなく、試練と共に脱出の道を既に備えているから。」彼はクリスチャンではないですよ。しかし、聖書の言葉一つで乗り越えることが出来たと言うのです。神の言葉には力がありますね。

私は2週間連続で関東を巡回というか巡って、聖書のお話をして来ました。

そこで、私の大事な友人が本当に試練のただ中にあるのを見て、2人でここを開いて分かち合いをしました。その中で少しひらめいたことがあったので、今日皆さんにお分かちしたいと思い、前に立っています。

13節は4つのことを言っています。その1つ1つを考えてみたいと思います。

1) あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。

あなたがたとは、コリント地方にあった教会のメンバー/クリスチャンのことです。

あなたがた（クリスチャン）が経験した試練はみな（どれもこれも全部）、人の知らないものではありません。

これは、クリスチャンになっても試練はあるということです。クリスチャンでなくても試練はあります。クリスチャンであるかないかというのは、試練とは関係ありません。

クリスチャンであろうがなかろうが、試練は来ます。

この世界は試練で満ちていますね。私も正直言いまして、人生最大の試練はクリスチャンになってから来ました。しかも、1年の間に3連発です。もし神様の支えがなかったら、私は恨みがましい人間になっていたと思うのですが、神様の恵みによって支えられました。試練のただ中で神様が支えてくださったな、と今実感してるんですね。

ところで、試練とひと言で言っても色んな試練があって、ここでの試練は“誘惑”と翻訳し直すことも出来るそうです。「あなたがたが遭った誘惑は、人の知らない誘惑ではない。」

つまり、自分のせいではない試練もあるし、自分の欲望から出て来て、それに反応してしまう誘惑もある。試練と言っても、全部が全部 世の中が悪いと言っているのではなく、身から出た錆みみたいな試練もまた あるんですね。

「なんで、この世界に試練があるんだ?!」 この世界は天国じゃないから。

「じゃあ、この世界って いったい何なのか？」 問題を持っている人間が作っているんです。

そして、問題を持っている人間のうちの1人に私も入ってます。

ドストエフスキーというロシアの大文豪がいますね。最近の若い人に“ドストエフスキー”言うても、「飲み物ですか？」と昔言われたことがあってですね。なんか ウィスキーと発音似てる。

ドストエフスキー。ウィスキー。「新しいアルコール飲料ですか？」みたいな。

『罪と罰』の話しても響きへんもんね。ラスコーリニコフ。「ピロシキみたい」とかね。

だから、分かち合う相手がいない。60歳くらいの人はやっぱ読んでるね。

ドストエフスキーは、なぜこんなストーリーを考えつくのか？ 頭の方で出て来た登場人物が、最後の最後で「これかよ！」と。柔道で言うなら、巴投げ4連発くらいの本ですよ、彼の作品は。

“こかした！と思ったら投げられてる”みたいな。ドストエフスキーの説明には ちょっとふさわしくないんですけど。「この人 天才やな」と。翻訳本で読んでも「こんな表現できるんや。すごいな」と思うのですが、文学の天才でも、彼は1つ大きな問題を抱えてました。

この人、ギャンブル依存症なんです。ルーレット賭博をやめることが出来ない。

「やめなアカン、やめなアカン」思いながら、ギャンブルに印税を全部つぎ込んで、とうとう食べる事が出来なくなって、書く元気もなくなって、「とにかくパン一切れを」と、出版社社長のステルロフスキーのところに行って「すまんが前借り頼む。」

ステルロフスキーは彼の才能が分かっているの、前借りで金を与えておくことによって、他の出版社から一切出版できないように困ったんです。しかも、また借りに来ることがちゃんと分かっている。

ドストエフスキーはステルロフスキーから金を借りて、パン屋に行く前に賭博場に向かってしまう。そして全部すってしまふ。「もう食っていけない！すまん。もう一遍貸してくれ！」待ってた、それ。

「仕方ないなあ。じゃあ約束しなさい。あなたが書く本、あなたの全集の著作権は当社からだ契約結びなさい。」「そんなもん、なんぼでも結ぶ！」 その繰り返し。

ところが、全集を書くと言ったけど、書く時間が全部ギャンブルで、結局1冊も書けへん。

そこでステルロフスキーが、ちょっと期限決めようよと。「大作書くには6年あったら十分だろう。6年間に1本 作品書いてくれ。」「分かった。先に原稿料くれ。」

貰った原稿料で、6年の猶予期間のうちの5年をギャンブルに費やすんですよ。

この期限を超えると、向う9年間の彼の本の印税は全部ゼロにするという契約を結んでいるんです。あと11カ月しかないという時、その時『罪と罰』を書いていたので、他に大作なんか書けない。

ところが、すぐに書けそうな題材があった。ギャンブラーの本ですよ。これを妻に口述筆記で書かせて出来たのが『賭博者』という本です。これは、ギャンブル依存症の更生施設でテキストで使われるくらい。ギャンブルの虜になった人が、いかに人格が壊れて行くかを生々しく。

ルーレットが回っている時の心境が、読んでるだけでワクワクするような。

なぜ生々しいことが書けるのか？ 自分の体験や。だから、転んでもただでは起きんというか、自分の大失敗経験を題材に小説にして。全部前払いでお金を貰っているから、何にもならないんですけど。そんな人です。

だから、彼はすごい作品をたくさん書いたけど、ずーっと困ってるんです。金に困り・友人に困り、借金で追い詰められた心境なので言わなくてもいいことを言ったり、やらなくてもいいことをやらかしたり。いっぱいトラブルを起こしているのですが、その場合、試練と呼んでいいのだろうか？

自分が選んだ愚かな選択の結果を刈り取っている…だけかもしれませんね。

でも、それも含めて試練…誘惑と訳すこともできるし試練と訳すこともできる…そんな問題を持っている人って、全員じゃないですか？ ドストエフスキーだけですか？

程度の違いはあっても、私たちは何ものかに対しては依存症的であったり、何ものかに対しては病的であったり、何かに対しては非常に過激な反応をしてしまうんじゃないでしょうか？

あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。

なぜなら ここは地上です。ここは天国じゃない。神から離れた世界では、問題があつて当たり前なんですね。その問題の中には、自分のせいではないのに降りかかって来たというのがありますが、自らが原因で起こしたというのがありますよね。そういう人間たちが寄せ集まって生きているこの世の中で、試練がないことを期待すること自体がおかしいです。試練に満ちています。この世界は。

“世界は試練に満ちている” って暗いタイトルや。でも、聖書は言ってるんですね。

あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。

2) しかし、朗報があります。次の言葉ですね。神は真実な方です。

「この世界は試練だらけだ」と言った後で、なぜパウロは「神は真実な方です」と言ったのか？

私たちは、自分の人生で経験した出来事と神をイコールで結び付けて考えやすいからです。

次から次へと酷い目に遭い続けていくと、その不幸な事・酷い目・嫌な事と神の人格がイコールで結ばれて、「神は酷い方だ。意地悪な方だ。冷酷な方だ。残酷な方だ」と思いやすいのですが、人生で私たちが経験した出来事と神は別物です。神は真実です。真実とは、変わらない・動かない・移り変わる事が無い一貫性のある態度で誠実を保つ姿勢の事です。

神をどのような方と考えるかによって、その人の人生の中身は随分違ったものになるのではないかなと思うんですね。神に対する考え方が、その人の人生を形作っていく面があると思います。

もし「神は私に意地悪で、失敗を許さず、いつも完璧を求め、もし失敗したら罰を下そうとしている方だ」という神概念を持っていたら、その人の人生の目標は、いかにして失敗しないようにするかということで、ピリピリして汲々として、できるだけ失敗せんとこ・失敗せんとこ・失敗せんとこ…。それでも失敗した時にメチャクチャ落ち込みます。「あ～、私は生きていく資格がない。私は失敗してしまった…」

そして、もう二度とその思いをするのが嫌だということで、失敗しない人生を選んで行くんじゃないでしょうか？ すなわち何もしない人生です。何にも挑戦しない人生です。何にも挑戦しなかったら失敗ありませんから。しかし、神は私たちに、1回しかない人生を「失敗するな、失敗するな」と汲々として生きるために与えたんじゃないです。

神様という方は真実な方です。もっと暖かい一貫性のある態度で誠実を尽くし続けてくださる方。いつも真実で寛容で、私に最善を導いてくださっている方。失敗しても「ドンマイ！ 高原、大丈夫だ。お前が失敗することくらい分かってる。」「やっぱり、そうですか！」みたいな。

失敗しても「わたしが付いている。大丈夫だ」というような激励をもって、私の応援団長として、私を助けよう、私に最善を導こうとされている方なのだ、という神概念でそれを捉えようとしている人は、多少の失敗によっても潰れてしまうことなく、前へ前へと進んで行けるんじゃないですか？ 神はどんな方なんですか？というその人の神概念によって、人生の生きる構えが変わって来ます。

悪魔は、聖書を見ると“嘘つきや”と書いてあるんです。この世界で正しい神概念を提供しているのは聖書だけです。

去年 フランスの中学校で、社会の教師が首を落とされて死にました。事の発端は何か？

その中学の1年生の女の子がイスラム教徒で、「先生が『ムハンマドの風刺画を見せる。イスラム教徒の生徒たちは見たくないなら出て行ってもいいから』と言って、出されようとしたけど、私は抵抗して教室に残ったので、『言うことを聞けんのか！』と、2日間登校を止められてしまいました」とお父さんに言ったんです。

彼は「イスラムに嫌悪を持っているな。けしからん奴だ！」と、インターネットに「ここの中学の〇〇教師はこんな風にイスラム教徒を差別している。イスラム教徒の生徒たちを外に出して、言うこと聞かなかったからという理由で2日間学校に行けなくしたんだ！」と出したんです。

それを見た18歳のイスラムの男性がこの教師を襲って首を切断した。彼も警官に射殺されました。

ところが、この女子中学生が言ったこと、嘘だったんです。日頃から不真面目で、殆ど学校に来てなかったのだから、懲らしめのために2日間登校禁止を言われた。本当のことをお父さんに言えば、お父さんはめっちゃくちゃ怒るだろう。真実を知られたくないためにウソ話をした。

そもそも、その授業に彼女は出てない。

その嘘のために2人の命が亡くなり、お父さんは殺人幫助（ほうじょ）罪で逮捕され、自分の人生も非常に困難なものになってます。別に爆弾を使ったんじゃない。嘘。

嘘というのは、嘘を真実と思ってそれを実行したら、人生は破滅します。

皆さん、聖書は“悪魔は元々嘘つきだ”と書いてます。悪魔はいますよ。目には見えないけど、私たちが聖書の言葉を信じようとする時に、何か知らないけど、それに抗うような・抵抗するような感情。悪魔がつく嘘の中で1番ひどい嘘は「神は不真実だ。神は愛なんかじゃない。神は不公平で 神は厳しくて 憎悪の神。もっと言えば、神なんか本当はいない。」 無神論。

嘘を真実として それを信じ そのとおり実行したら 人生は破滅します。

もし そういうネガティブな感情が出て来たら、聖書・神から来ているものではありません。

警戒してください。聖書だけが、正確に神ご自身の本質を伝えてるんです。

聖書は言っています。神は真実な方です。私たちが真実でなくても、神は真実な方なんだ。

3) あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。

試練のただ中にある時、「もう、耐えられないよー！」と思うかもしれません。

しかし聖書は、あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいませんと書いています。

「でも、現に耐えられないんだ！」と言う方、実は そんな内容の手紙をクリスチャン ドクターに書いた人がいるんです。

随分前の話です。アメリカのクリスチャン女性のリンダさん。3人のお子さんがいます。

とってもいいお母さんで、毎週日曜日は教会に行き、コーラス隊に入ってイエス・キリストの福音を伝えることにも関わっている方ですが、なんと ご主人が不倫した。それが分かった時、大ショックだったのですが、問い詰めると逆ギレしたんですね。居直って。もう、どうしていいか分からない。

そこで、カウンセラーの所に行って「こんな状態です。どうしたらいいでしょう？」
するとそのカウンセラーが、「彼をありのままに受け入れなさい。批判がましいことを口にしてはいけません。ひたすら従順に仕えなさい。無言の振る舞いによって、夫の心を取り戻しなさい。決して責め立てたり、非難したりしてはいけません。そうすれば、いつの日か彼は帰って来るでしょう。」

それで、一生懸命そうし始めたのですが、ますます酷くなったんです。というのは、夫の方は不倫・悪いことをやっているにも拘らず、自分に不都合なことが何一つ起こらない。
なので、市民権を得た・不倫を堂々とやる権利を得たかのように振る舞い出したんです。
自分がやっていることを、1つも咎めることなく全面的に受け入れてくれるので、ますます図に乗って嵩にかかって、大胆にやるようになった。

もう耐えられない！「確かに聖書には耐えられない試練にあわせることはなさいませんと書いてあるけれど、もう耐えられません！」

そこで、ドブソン博士というクリスチャン ドクターに手紙を書くんですね。
彼は家族問題や結婚問題について、何百も何千もこんなケースを扱って来た方です。
アメリカのドクターで、同時にクリスチャンとして非常に敬虔な・有意義な・良い講演をたくさん残しています。

「どうしていいか分かりません。夫は言うんです。『お前と分かれるつもりはないよ。3人の子供たちは僕にとっても大事だから。あの子たちを手放すつもりはない。だけど、愛人を手放すつもりはもったいないから。彼女と別れるなんて考えられない。彼女とは別れない。そしてお前たちとも別れない。両方とも欲しい。』 祈りました。仕えました。従順にやりました。でも、もっと酷くなりました。どうしたらいいでしょう。」

ドブソン博士が短い手紙を下さいました。
「リンダさん、あなたがやっていることは間違っています。あなたの夫がしていることは姦淫（かんいん）です。それは、この世の法律に照らしても、神の律法に照らしても、明確な罪です。
明確な罪を悔い改めるつもりが全くないのに、その人に従順・言いなりになるのは愛ではありません。それは愛とは呼ばない。それは、最悪の事態、すなわち離婚を避けたいという あなたの心の弱さから出て来ていることで、あなたの対処の仕方は間違っています。」

罪は単なる法律的なことよりも、聖書で見ると霊的な問題です。霊的な問題を取り扱うのは心理学や法学ではなく 神の言葉です。あなたはしっかりと神の言葉に立って、夫にこう言いなさい。

『その女（ひと）と一緒に居続けながら、私たち家族と居続けることは出来ません。あなたは2つのうち1つを選ばなければならない。私たちを選ぶのか。それならば、その女（ひと）と切れなければならない。その女（ひと）と繋がりながら、私たちと家族でいることは出来ません。』

もう1つ言っておかなければならないことがあります。あなたが神の前にこの問題を悔い改めなければ、1度死に、死んだ後に厳粛な神の前に立って、裁きを受けることになります。あなたの人生の選択の責任はあなた自身が受けます。』 そのようにキツパリと言いなさい。」

彼女はそれを実行しました。何が起こったでしょう？ その女と切れて、「悪かった！」と言って戻って来たんですよ。でも彼女は書いています。「戻って来なくても、途中から“これが正しい道だ”と分かっていました。」

もし耐えられない試練になっている場合は、その試練に対するアプローチの方法が間違っているために、本当なら乗り越えることが出来るはずの試練が、より重く・より複雑なものになって、耐え難くなっている可能性がありますね。

正しい対処法で対処するなら、耐えられない試練はないと聖書は言うんです。

いつも3つのポイントでやっているけど、今日は4つなので、体の調子がちょっとおかしいですね。

4) むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていただきます。

悪魔は「脱出の道なんか、もう無い！」と言って、問題に目を向けさせようとしています。

脱出の道は英語で Way。My way のウェイ。Way にはもう1つ意味があります。“方法”。脱出の方法。

問題にばかり注目していると、その問題に呑み込まれて、客観的に自分の立場が見えなくなる。でも、神様は既に解決の方法を持っておられるので、それは何かを神の前に祈りながら考えるのです。「いや、この問題は解決法ないよ…。」 そんなことはない。

先程紹介した河野さんが、あるインタビューに答えています。

「なぜ、そんな無茶苦茶なプレッシャーの中で、汚名を着せられた中で、心折れず くじけなかったんですか？」 要所要所で“この人！”という人が出て来るんですけど。

もうダメか！と思ったら、予想もしていなかったところから助っ人が現れて、アドバイスしてくれる。

もうどん底だった時、松本の教会の大沢牧師が、河野さんの3人の子供たちが情緒不安定にならないように、毎日病院に来てくれたそうです。そして河野さんよりも、むしろお子さんたちに色々話をしあげたり・励ましたり・慰めたり・ある時には遊んだり。

ある時、大沢牧師がこう言いました。「私は河野さんが犯人であろうとなかろうと、どっちでもいいんです。河野さんが困っているから助けたいんです。」これが力になったと仰っていました。

彼を通して、変わらない真実に触れたんですね。

皆さん、傷つけるのも人ですが、癒すのも人ですよ。神様は人を癒すのに人を使うことが多い。

要所要所で“この人！”というキーパーソンが現れて、助け起こしてくださる。脱出の道がある。

これを連想させる小説を昨年読みました。『たゆたえども沈まず』。これはパリの標語です。

“たゆたえる”分かりますか？ 揺れるという意味。大海原で大波で船が揺れて右へ左へ上へ下へ。ものすごく揺らされるけど、どんなに揺らされても沈みはしない。

フランスの歴史ってそうですよ。劇薬のフランス革命。しかし、パリはまだありますからね。

『たゆたえども沈まず』というタイトルの本、分厚くて全部説明できないので簡単に言います。

画家のゴッホ（1853-1890）。ご存知ですよ。ゴッホにはテオという弟がいます。

テオは画商で、兄さんが描いた絵を売ろうと一生懸命頑張るけど、ゴッホは生きていた時 800 枚描いて、売れたんは 1 枚だけ。その 1 枚も弟がお情けで買った。

お情けというか、彼は兄の才能をホントに信じ切ってたんですね。だけど先端過ぎて、その時代には受けなかった。皆、見向きもしなかったんです。ゴッホとテオの往復書簡集が岩波から出ていますね。

それとは別に、明治時代にフランスを拠点にしたジャポニズムの代表、浮世絵や錦絵をヨーロッパに売りさばいていった画商がいました。林忠正（はやしただまさ/1853-1906）です。

19 世紀末のパリにはヨーロッパ中のアートの天才たちが集まるのですが、日本の浮世絵を見た時に衝撃。「うわっ！スゴイ！」

僕も小さい時、“永谷園のお茶づけ海苔”に東海道五十三次のカードが入っていて、あれ欲しかった。皆さん、記念切手で 1 番高いの、東海道五十三次の桑名ですよ。（「ナニゆうてんねん」という顔が…）すごいなど。あれ、版画ですからね。ゴッホもその影響を受けた 1 人です。

林と部下の重吉（じゅうきち）など 4 人が主人公といえば主人公なんですが、実際に林とゴッホは出会ってないんです。出会ってないけど、それから 150 年以上経って。

作者は絵画に非常に精通している人なんですね。

ゴッホはとにかく挫折ばかりです。彼が 1 番やりたかった仕事はキリスト伝道者ですよ。

だけど、労働争議に参加したので教会をクビになるんです。で、2 番目にしたかった画家になるのですが、800 枚描いて生涯 1 枚しか売れなかった。挫折ばかり。

だけどゴッホって、今 手が出ないじゃないですか。『ひまわり』あったでしょ。安田生命かどっかが買いましたよね。80 億円？130 億円？ 今日『聖書と福音』で 570 億円の絵の話をしたんですが、絵の世界というのはよう分かりません。とにかく 今ゴッホ展をやったら、どこでも大入り満員です。

でも彼は、どん底の時に何度も絵筆を折ろうとしたというか、絶望で精神的にも大きな問題を抱えていたので、感情の起伏が非常に激しく、発作的に自分の耳を切って封筒に入れて娼婦に送ったり、それで逮捕されたり、色々色々ありますよね。

だけど 150 年後、ゴッホは押しも押されもせぬ天才画家という評価が定まっています。

林忠正も、ジャポニズムでフランス政府から 3 回も最高の勲章をもらっている。

お互いに歴史上は出会ってないんだけど、未来から過去に向かって語っているんです。

「ゴッホ、落ち込むな！ 押しも押されもせぬ大画家としての評価を、欲しいままに手に入れる日が必ず来るから！」 ゴッホに出会えそうな人は林しかいなかったんです。

林忠正はフランス語ペラペラ。「ボンジュール」とか言いながら。ボンジュールだけじゃね。

「ボンジュール、エスカルゴ〜」、ほかに出てけえへん。エスプリとか。ほかに何や？ もうええわ。

要するに、未来から過去に呼びかけている物語。

「あなたは今大揺れに揺れているけど、歴史の中に埋没してしまうような画家じゃなくて、後に、何百億円払ってもあなたの1枚が欲しいと争奪戦になるときが来るんだから。」

でも、それを知らないゴッホはその本の最後で、林が帰国する時に「私を浮世絵のふるさと日本に連れて行ってくれ！」と頼むんです。林が「あなたの故郷は日本じゃない。アルルだ。アルルに行け」と言って。そこで大作が出来るわけよ。

現実と作者の妄想がグチャグチャになってるんですけど、それ、聖書を読む時にかぶるんです。

問題があるとき、私たちには問題を乗り越えた後の自分がまだ見えてないので、この状態が永遠に続くんじゃないかと悲観的なものの見方に入り込みやすい。

だけど、神は未来から見て「大丈夫だ。解決の道はある。大丈夫だ」と呼びかけている。

人類歴史の最後まで全部ゴールを見届けた方は、「脱出の道を備えている」と仰ったんですね。

私たちには色んな試練がありますが、まだクリスチャンでない方々にとって最大の試練は、やはり死の問題ではないですか？ 死が迫って来た時、自分が持っているお金も・地位も・名誉も・若い時に取ったトロフィーや賞状やメダルも、死は容赦しません。

人間にとって最大の試練の時ですらも、神は**脱出の道を備えて**くださっているんですね。

あるとき、イエス・キリストはこう言われました。「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。**」

キリストは試練のただ中で、私たちの脱出の道となってくくださる方です。

脱出の道とは単なる方法ではなく、私はイエス・キリストの別名ではないかなと思うんです。

試練そのものはまだ行き過ぎてなくても、その試練のただ中で、「この問題はわたしから来ているから大丈夫だ。」私も、何の解決もないのに「これは神から来てるんだ」と分かった時、何とも言えない平安に満たされることがあります。

ところで、不思議なことに、何となく良い人の方が試練を受けている気がするんですよ。

良い人に困難が降りかかるのはなぜだろう？ これは永遠のテーマですよ。

『悪い奴ほどよく眠る』というか、皆さんのこと言うてるんじゃないですよ。別に寝てないけどやね。

悪行の限りを尽くしながらのうのうと生きてる奴、いっぱいいてるじゃないですか。

だけど、真実で真面目で純粋な方・誠実な方が傷を受けるみたい。

なぜ こんな事が起こるんだろう?!

しかし皆さん、人類の中で最も不条理な死に方をした方がおられます。どんな不平等・どんな不公平・どんな不条理をも上回って、最もこっぴどい目に遭って、良いことしかしなかったにも拘らず、本当に何も悪いことがなかったにも拘わらず、酷い殺され方で死なれた方がいます。

それがイエス・キリストです。

私が大好きなスイスのクリスチャン ドクターのポール・トゥルニエ（1898-1986）、ここでよく紹介することがあるのですが、トゥルニエさんのところに悩める人がよく相談に来るんです。

あるとき、スイスの有名な政治家（恐らく現職の大臣）の息子が深刻な顔してやって来て、悩みを打ち明けました。「僕はもう生きる気力が出来ません。死にたいです。僕は生まれて来てはいけない人間だったんです。」

彼はお父さんと折り合いが悪いんですね。ある日、お父さんが酔っぱらって夜遅く帰って来た。バーンとドア開けて。お母さんが迎えに行ったけど、部屋に入った時、怒鳴りつけている大きな声が聞こえて来た。「お前があの時、ちゃんと避妊してなかったから生まれたんやろ！ いらなかったんや、あいつは！ あれ、ホンマに俺の子なんか？」それが聞こえて来たんですね。

「前々から、お父さんは僕を受け入れてくれてないと思ってたけど、生まれた時からそんな風に思ってたんか！」その時、反抗していこうという気力すらも枯れ果てた。

「僕はもう生きていく力がない。資格もない。生まれて来てはならない人間でした…。」

トゥルニエは「酷い話だ。そんな酷いことを…。だけどね、私はあなたとよく似た境遇の人を1人知っている。この方は生まれたのが馬小屋だった。普通の家で誕生することが許されなかった。この方は大きくなってからも、君が言われたように『私生児、私生児、父親が誰か分からない』のように言われ、親切にした相手から裏切られ、手塩にかけた弟子から『あんな奴知らない』と言われ、世話になった人は何万人といたはずなのに、裁判の時は誰も彼の側に付くことはなく、裸にされ、辱めを受け、十字架に掛かって死んでくださった。

このイエス・キリストは神に憎まれていたと思いますか？ 神がイエス・キリストを憎んでいたのだから、そのようになされたと思いますか？ 『神が愛なら、なぜ人生にこんな不条理があるのか』と君は言ったけど、人類の中で最も不条理な死に方をしたイエス・キリストは、父なる神様から憎まれていたのだろうか？」「いや、そうじゃないと思います。」「そのとおり。では、なぜ十字架に掛かったのでしょうか？ 君の罪を身代わりに背負って、赦しを与えるために死んでくださったんだ。」

キリスト教国なので、キリストの話をよく聞いていたと思いますが、自分の痛みを通して「イエス様もまた、不条理な扱いを受けながら大きくなられたのだなあ。もし世の中で、僕を本当に理解出来る人がいるとしたら、それは人としてこられた神イエス・キリスト以外にない。」

そして、診察室で「イエス・キリストを私の救い主として受け入れます」という祈りをした、という記録が残っています。

耐えられるように、試練と共にイエス・キリストという脱出の道を備えて、今日 皆様が神に帰るのを待っておられます。

いかがでしょう。クリスチャンになった後も試練は来ます。来ますけど、正しいアプローチで必ず解決があり、いつもキリストが傍に寄り添ってくださるということが約束されているんです。

それが分かったら、きつかった人生を振り返った時、「そのきつかった時が、キリストと1番親密な交

